

1 女性の働く環境

— 30年前の米国と今日の日本—



国井 秀子
(株) リコー

世界と比較すると、日本における女性の社会進出はきわめて遅れているといわざるを得ません。これは少子高齢化時代を迎え、またグローバルな競争を勝ち抜いていくためにも日本がぜひとも解決しなければならない大きな課題です。働きやすいインフラが整備されれば、女性も働き続けることができ、幅広く活躍することができます。特に、情報通信技術の分野はニーズの高い成長分野であり、女性やマイノリティにもキャリアを切り拓くチャンスが広がっています。30年前に米国へ留学し、この分野へ転向した私の経験がこのことを証明しています。私の経験をお伝えし、なぜ継続してチャレンジしてこられたか、また情報通信分野における可能性について考えてみたいと思います。

はじめに

昨年 IEEE の東京支部から光栄にも女性パイオニア賞をいただきました。IEEE の会員の中で私が日本人女性として最も会員期間が長いということとそのとき知りました。IEEE には米国留学中に入会したのですが、日本で女性が働き続けることが大変だった時期から30年間継続できたことを改めて感慨深く思います。世界的に見れば、日本は今なおジェンダーフリー後進国といわれています。そのような中で、私がなぜ継続してこられたかを知っていただくことは今の日本でも役立つことと思ひ、この記事を書いています。

振り返ってみると、私のキャリアのベースは、お茶の水女子大学在学中に学友との交流の中で女性が働くことの意義を確信することができたこと、その後米国で生き生きと働く女性のモデルを何人も間近に見てきたこと、さらに、IT 分野の研究開発に携わり日本でもニーズが高くキャリアアップの機会が多かったためだと分析しています。

技術立国を標榜する一方で、世界に比した日本のジェンダーイコリティの現状を見ると、製造業に携わるものとして危機感を強く感じています。私の経験からも、IT 分野は女性にもチャンスの大きい分野といえるでしょ

う。女性が働きやすいインフラを整備することがまずは重要ですが、この分野でロールモデルとなり得る女性技術者・研究者が数多く育つことで、日本の社会全体を変えていく力を生み出すことができると確信しています。今日でも日本の働く女性の環境において参考になりそうな30年前の米国での生活を、当時のIT分野の雰囲気ともにお伝えし、私の経験やその経験を通して感じていることをご紹介します。ひとりひとりが壁を乗り越えてキャリアを築いていこうというエネルギーになれば幸いです。

世界に見る日本の現状

日本がジェンダーフリー後進国だと言いましたが、いったい日本はどのくらい遅れをとっているのでしょうか。残念ながら日本には長期の流れを見られるデータがほとんどなく、これ自体が問題です。国連では政治・経済分野における女性の不平等の度合を計る尺度としてジェンダーエンパワーメント測定 GEM (Gender Empowerment Measure) と呼ばれるデータを毎年発表しています。ジェンダーとは社会的、文化的性別を意味します。GEM は、各国別に国会議員数、管理職・専門家数、平均給与などにおける男女差のデータを基に計算したも

GEM 順位	GEM 値	国名	HDI 順位	GDI 順位
1	0.932	ノルウェー	1	3
2	0.883	スウェーデン	5	1
3	0.866	アイスランド	2	4
:				
9	0.816	ドイツ	21	20
:				
12	0.808	USA	8	8
:			4	2
18	0.707	シンガポール	25	--
:				
42	0.557	日本	7	14
:				
45	0.533	フィリピン	84	66
:				
53	0.502	韓国	26	27

- HDI (Human Development Index)
人間開発指標
→ 基本的人間の能力の達成度
● 平均寿命, 成人識字率, 就学率, 国民所得
- GDI (Gender-related Development Index)
ジェンダー開発指標
→ 男女の格差を考慮して算出した
基本的人間の能力の達成度
- GEM (Gender Empowerment Measure)
ジェンダーエンパワーメント測定
→ 女性の社会における意思決定への
参画度合い
● 議員 / 行政職 / 管理職 / 専門職・技術職に
占める女性の割合, および女性の所得の割合

日本はHDIやGDIは高い順位にあるが、
GEMでは順位が大幅に下がる。
||
女性がまだまだ社会で活躍できていない。

(資料出所: 国連開発計画 (UNDP) Human Development Reports 2006)

表-1 国連発表のジェンダーイクオリティの国際比較

ので、このGEMの比較において日本は、2006年度に世界で42位でした(表-1)。42位という順位は、先進国の中ではきわめて低い位置にあることを示しています。

日本の大きな特徴は、GEM以外の指数はかなり高い順位にあることです。すなわち、人間開発指数HDI (Human Development Index) は7位、ジェンダー開発指数GDI (Gender-Related Development Index) は14位でした。日本のようにGDIが高くGEMが低いということは、女性の基本的能力開発は進んでいるにもかかわらず、その活用が遅れていることを示すと考えられます。これは少子高齢化の時代にまったくもったいない話です。働きたいと思っている女性にとってインフラの未整備が大きな重荷です。

実は、日本の実態をもっと表しているデータがあります。世界経済フォーラムの発表している男女平等指数ランキングでは日本は世界128カ国中で91位です(表-2)。残念ながらこれは、私の経験と照らし合わせても十分納得できるものです。しかも、2005年の38位(58カ国中)、2006年の80位(115カ国中)から91位に後退しています。日本でも女性の社会参画の度合いはかなり改善されてきてはいますが、他国の改善のスピードに比べて非常に遅いため、ますます世界から取り残されている状況といえるでしょう。

一方、同じアジアの国々の中でも女性の活躍がとりわけ顕著な国があります。中国や世界経済フォーラムのデータを示した表-2で第6位に位置しているフィリピン

などです。昨年11月にフィリピン大学の工学部長を務められているCristina L. Guevara教授が訪日された際に、IEEEのWomen in Engineering (WIE) (東京)が開催したセミナーで、フィリピンの非常に進んだ現状について紹介がありました。表-3はその一部のデータを許可を得て編集したのですが、工学部における学生数も教官数もその女性比率がきわめて高いのです。欧米などのジェンダーバイアス改善に積極的に取り組んでいる国々でもここまでのバイアス解消事例は少ないと思います。

このデータは、環境が改善されれば日本でも理系、工学系の女性比率が半分になる大きな可能性を示しており、非常に心強いことです。もしこのようなデータを見ていたら、2005年1月に起きたハーバード大学 Summers 学長の「科学技術の分野で秀でた功績を残した女性が少ないのは、生まれつき男女間に素質の差があるからだ」という問題発言は、なかったかもしれません。この発言が原因で約1年後に教授会で学長不信任決議がなされ、Summers 学長は罷免されています。

では、なぜ日本では女性の活用がこんなにも遅れているのでしょうか。儒教思想の影響が大きい韓国も最近まで似たような状況にありました。少子高齢化対策として男女共同参画の活動もかなり取り組まれてきたはずなのですが、世界の中での日本の順位はいつこうに上がっていません。1986年に施行された男女雇用機会均等法は、単なる努力目標でしかなく世界的にも大きく遅れたものでした。1999年によろやくこの法律が改正されて募集・



順位	国名
1	スウェーデン
2	ノルウェー
3	フィンランド
4	アイスランド
5	ニュージーランド
6	フィリピン
：	
31	USA
：	
91	日本
：	
97	韓国

■ Gender Gap Index
男女平等指数

- さまざまな項目で男女格差を指数化
- 労働参加率, 賃金, 所得, 議員/行政職/管理職専門職/技術職数, 大臣クラス経験者数, 識字率, 就学率, 出生率, 健康余命等

日本は調査128カ国中91位。
2005年（58カ国中）38位,
2006年（115カ国中）80位から後退。

||

女性の台頭のスピードが他国に比べ非常に遅く、ますます世界から取り残されていく。

(資料出所：World Economic Forum, Global Gender Gap Report 2007)

表-2 世界経済フォーラム発表の男女平等指数ランキング

採用, 配置・昇進について女性への差別が単なる「努力目標」から「禁止」と強められました。しかし、違反しても処罰されることはなく、せいぜい違反企業の名前が公表される程度の緩い法律でした。今年4月から改正男女雇用機会均等法が施行され、初めて罰則規定が盛り込まれました。しかし、いまだ「厚生労働大臣が事業主に対して、均等法に関する事項について報告を求めたにもかかわらず報告をしない、または虚偽の報告をした者は20万円以下の過料に処する」という軽い行政罰でしかありません。これでは、GEMや男女平等指数ランキングが早急に上昇することは期待できません。

ジェンダーイクオリティの活動への参加を呼びかけると、女性自身からそれこそ差別だという声が上がってくるという話も結構耳にします。キャリアアップに向けて障害が何もなかったとしたらその人は幸運ですが、社会として現状問題があることはデータを見れば分かります。

私の経験

■ シリコンバレーの輝く太陽のもと新たな分野へ

女性が働き続けるには、社会環境を整えることがまずもって重要ですが、同時に個々の女性にはぜひチャレンジしてほしいと思います。さて、ここからは現在でも世界に比べて大きくジェンダーイクオリティが立ち遅れている日本で、私がキャリアを重ねてこられたエネルギーのひとつの大きな源泉となっている30年前の米国留学時代からの経験を述べたいと思います。

専攻分野	University of Philippines		De La Salle University		University of Sto. Tomas	
	男	女	男	女	男	女
化学工学	278	358	95	87	172	220
土木工学	298	184	260	57	439	147
コンピュータ科学	223	186				
コンピュータ工学	226	107	236	59		
電気工学	71	11			365	40
電子通信工学	306	113	728	158	475	152
経営工学	189	314	236	181	278	300
機械工学	211	47	452	99	430	18
その他	368	339				
合計人数	2170	1659	2007	641	2159	877
女性比率	43.3%		24.2%		28.9%	

表-3(a) フィリピン3大学(工学系) 学生数の男女比較

	University of Philippines		De La Salle University		University of Sto. Tomas	
	男	女	男	女	男	女
教官人数	123	43	58	23	69	58
教官女性比率	25.9%		28.4%		45.7%	
学科長人数	6	3	3	3	4	3
学科長女性比率	33.3%		50%		42.9%	

表-3(b) フィリピン3大学(工学系) 教官数の男女比較

(資料出所：Cristina L. Guevara, "Women Engineers as Academic Leaders" IEEE WIE 講演会, 2006年11月, 東京)

私は、1973年の秋から1982年の春まで、一時帰国した時期を除いて通算約7年間、米国で勉強、研究そして仕事をしていました。最初の約2年間は夫がスタンフォード研究所やIBMのサンホゼ研究所などに在外研究員として滞在していたときでした。私はスタンフォード大学のサマースクールで留学生向け導入教育を受けた後、サンホゼ州立大学の修士課程に入学しました。このとき私は日本で修士まで勉強した専門分野を、物理学からサイバネティクス、その半年後にはさらに電子工学に変えたのです。この時期は電子工学学科の中で電子回路もソフトウェアも教えているところが多くあり、サンホゼ州立大学もそうでした。

ここで専門分野を変えたことが、その後のキャリアアップの大きな転機となっています。それ以前も夫からソフトウェア分野をやらうよと誘われていたのに「興味がない」と言い続けていました。気が変わったきっかけはスタンフォード研究所においてあった1冊のLISPのマニュアルです。それまでかじったことのあるコンピュータ言語はお茶の水女子大学修士課程で学んだFORTRAN, ALGOL, それにアセンブリ言語でした。ところが、LISPは全然違うイメージで、なぜか非常に感動しました。私にとってそれまでコンピュータは道具としての位置付けしかありませんでしたが、LISPはそれ以上にもっと想像力をかき立てられる感覚がしました。道具は道具でも新しい世界を切り拓けるものと思ったのかもしれませんが、あるいは言語というより、そこに出ていたプログラムの例が新しい世界を見せてくれたのかもしれませんが、いずれにしても、このときが私の人生の大きな分岐点になったのです。

後輩の女性によく言うのですが、人材の供給が不足している新たな分野のほうが活躍の機会が多く、特に、女性やマイノリティがキャリアを切り拓くには新規分野に挑戦することをお勧めします。私のキャリア形成にとってよかったと思う一番のポイントはここです。私自身は当時、特に強くそのことを意識していたわけではなく、「面白そう」ということで成長する分野に入ったのですが、後輩には分野の選択の重要性を強調しています。ただし、時代は変化するのでニーズの変化に敏感である必要があります。

1970年代のシリコンバレーはコンピュータ科学の研究がカリフォルニアの太陽のように光り輝き、日に日に大きく育っていることが実感できる時期でした。人工知能分野の草分け John McCarthy 教授、データ構造について当時バイブル的な教科書を書いた Donald E. Knuth 教授、リレーショナルデータベースを考え出した E. F. Codd 博士など数々の著名な研究者がコンピュータ科学

の基礎をまさに築いている最中で、学び始めたばかりの私にとっても非常にスリリングな感銘深い時代でした。こういう時期にシリコンバレーにいたことは自らのキャリアを築く上でも本当に幸運であったと思います。

■ 多様な教育体制、柔軟な育児体制のもとで

サンホゼ州立大学在学中の生活は、米国の多様性、柔軟性を享受して非常に充実していました。日本には不可能だったでしょう。クラスメートの年齢層は幅広く、仕事を持っている人、レイオフされた人、離婚した女性など実に多様でした。ここでは早朝と夜の授業もあり、働きながら最短1年で修士号を取れるプログラムがありました。さて、私にとっての問題はまず授業料。私立の有名大学よりはずっと安いものの、円の弱い時代に楽ではありません。新たに分野を変えたばかりであった私にとってはリサーチアシスタントやティーチングアシスタントに応募するのはむずかしい。そこで、昼間働いて授業料を稼ぎ、大学には早朝と夜出かけるという慌ただしい生活を送ることになりました。スタンフォード大学情報処理センターでプログラマ&アナリストという非常勤の仕事が見つかりました。

このとき子供は2歳から4歳の時期で、デイケアセンター（日本の保育園）に入るまでの短期間は保育ママに、その後デイケアセンターに預けていました。家庭で預かり育児してくれる保育ママはつなぎの対応として大変助かりました。保育園の送り迎えは夫と交代ですが、1台の車のやりくりと安い中古車は時々故障をするので、いつもひやひやしていた記憶があります。必要に応じてベビーシッターにもお世話になりました。日本では基本的に保育園や幼稚園しかない時代に、米国では育児支援の多様な体制が充実して、勉強するにも仕事をするにも助かりました。公的な育児体制はそれほどいいとはいえませんが、民間のサービスは充実していて、妥当な料金でなんとかなる育児環境が当時から米国には整っていました。

この時期は忙しくはありましたが、実は私にとってはクオリティオブライフが一番よかったときかもしれません。週末にパイを焼いたり、休日にハイキングに出かけたり、友人とのパーティが多かったのもこの時代でした。学業に関して、英語のハンディがあるなか上位10%の中にいたということを後で知りました。女性も大いに勉強し、働き、遊び、楽しい家庭を築くことができることを実感し、自己実現している女性を数多く見ることで、自らの自信も持てるようになりました。これが留学中の最大の成果だと思います。そして、多くの女性が普通に働ける環境を日本に築きたいという願いを強く持



つようになりました。

ところで、30年以上前に実現していた米国の環境が、日本で今実現できているのでしょうか。運良く親からの育児支援を受けて活躍ができる場合もあるでしょう。どういう形態でも女性の能力を示すことができれば大きな進歩です。しかし、大多数の女性にとって環境が整い、働くことが可能でなければ社会の大きな変革になっていきません。社会体制が整っていれば、肩身の狭い思いをせずに核家族の女性でも活躍できます。数多くの女性が実績をあげることが重要です。

育児をしながら、働きながら、大学にフルタイムで在学して修士号を取得することが可能であった環境は、多様性を重視する米国の強みだったと思います。画一的ではなく多様なキャリアパスが提供され、許容されている社会はとりわけ女性の生き甲斐を実現しやすい社会です。少子高齢化が社会問題になっている日本ですが、少子化の背景を分析し、もっと本質的な問題を見極める必要があります。柔軟で、経済的負担も少なく、かつ安心して子供を預けられる保育園の充実、学童保育の延長、在宅勤務やワークシェアリングの促進など女性の労働環境を改善する社会インフラを整備することが、第一に重要であることを強調しておきたいと思います。

■ シリコンヒルでキャリアアップ準備

さて、サンホゼ州立大学で修士号を取得後、日本で博士課程に行こうといたんは帰国しました。しかし、1970年代の日本はまだまだ発展途上で、結局1年足らずでまた米国に戻ることにしました。スタンフォード大学の若手教授から「これからはテキサス大学オースチン校が伸びる」と助言があり、応募しました。幸いこのとき、リサーチアシスタントにもなれて、基本的な生活費は自分でまかなえる状況になりました。オースチンはシリコンヒルの中心で、太陽に恵まれたサンベルトの中にあり、IT分野の企業も多く進出しているところです。

子供は小学校入学間近。日本語の習得や適当な学校が近くにないなどの問題があり、私の実家に預け、単身での留学となりました。時間的には余裕ができたのですが、精神的にはハードな時代でした。家族と一緒に楽しい生活から遠く離れて1人になり、急に大きな穴が空いてしまったような気分がしていました。それでも1年ぐらいうると徐々に自分のペースが確立できたように思います。夫は非常に積極的に私の留学をサポートしてくれました。日本の大学で情報科学を教えていたので留学のメリット



図-1 中央が筆者。在宅でスタンフォード大学にモデム接続をして仕事をしているところ。

もよく認識していたのででしょう。学会などの前後にはよく立ち寄ってくれましたし、夏期休暇などは私が家族のもとに帰国していました。単身の留学生としては恵まれていました。若い時代に大きな挑戦をしたことは確実に後のキャリアにプラスであったと思います。

テキサス大学は聞いていたとおりエネルギーに満ちあふれた大学でした。ヨーロッパからソフトウェア工学の重鎮 Edsger W. Dijkstra 教授を招聘するなど、大学のランクアップのための諸施策が打ち出されていました。リサーチアシスタントとしての仕事は当初ソフトウェア工学分野の研究でしたが、この分野を研究するには十分なソフトウェア開発経験を持ってからのほうが良いと判断して、1年後にデータベース管理システム分野に移りました。指導教官は物理学も同時に教えていた James C. Browne 教授で、性能解析の会社も経営されて超多忙な先生でした。3回のアポイントのうち2回ぐらいはキャンセルです。人の倍以上は働いている方で、専門分野が広いのみならず、自らIT分野の企業経営もされて現場のニーズをよくご存じであることが印象的でした。私が加わったのは、いくつかある彼のプロジェクトの中のNASA エンジニアリングデータベース管理システムの構築です。

このときの実際の問題意識が、私の博士論文のテーマとなりました。1980年前後はようやくリレーショナルモデルが広がってきた時代。Codd 博士に招待されて夫はIBMのサンホゼ研究所に1年ほどいました。そういふなか図らずもリレーショナルモデルの限界を取り上げることになってしまいました。リレーショナルモデルの

理論を活かしながらも、スキーマとしてはグラフをベースにデータモデルを拡張する考えです。要するにデータ間のリンクを中心にしたスキーマであり、Web時代の今の方が受け入れられるかもしれません。実際最近はこれが20数年前の発想であることに大変驚かれます。

テキサス大学オースチン校はきわめて国際的なところでした。まず驚いたのは、クラスメートのほとんどが外国人、さらには、教える先生も外国人が多いことでした。IT分野ならで、インド人と中国人がほとんどです。とりわけ博士課程は顕著で、アメリカ人の方がここではマイノリティでした。人種の多様性を体験したことは、その後のグローバル化の活動でも大変役に立ちました。

ところで、オースチンで私はさらにジャンプしたのです。起業の経験です。勉強と研究だけではなくソフトウェアツールを提供するベンチャーを学生時代に起業することができたことは非常にいい経験でした。今では日本でも起業するためのハードルがかなり低くなりましたが、当時は非常に大変でした。これも米国だからこそできたと思います。なぜそこまで挑戦したのかと聞かれることがあります。当時日本では女性が働くにはあまりに社会環境が悪く、子供を預けて背水の陣で留学していたからです。男女雇用機会均等法すら施行以前の日本で女性が自活するには、相当な経験や資格でもない限りサバイブできないと認識していたのです。

博士論文がかなりまとまってきたとき日本から緊急の電話が入りました。息子の世話をしてくれていた母が入院したのです。無事に手術は終了なのですが、帰国すべきどうか悩んでいたとき、リコーからソフトウェア分野の強化のためとお誘いがありました。オフィス分野の研究はゼロックスが圧倒的に強いからやめた方がいいという人もいましたが、逆にそれは私の決意を強めることになりました。「日本のソフトウェア分野を強くしたい」、そして、「女性の働く環境を改善したい」というその時感じた使命感は今も変わりません。

■そして、今

私は、1982年にリコーに入社して今年で勤続25年になりました。この間の活動について述べると大変に長くなるのでここで一挙に今日現在の話に飛びたいと思います。現在の任務は、ソフトウェア、システムなどの情報処理分野の研究開発を担当している部門の責任者で中国に設立した研究所の会長も兼務しています（一時期事業関係の任務のウエイトが高くなった時もありますが、基本的には研究開発を中心に働いてきました）。企業の将来の方向を考えて必要な先端技術を開発し、また、事業

部門の今日の技術の支援をするという非常にやりがいのある仕事です。研究開発のみならず、事業経験、海外経験、起業経験など過去30年以上の経験と学会活動や政府の審議会委員などの活動を活かしています。どの経験も無駄なことはなかったと思います。

さて、海外出張の機会も多く、肉体的には疲れるのですが、海外にいと気分的には何となくほっとします。最近中国やヨーロッパへの出張が多いのですが、出張先の国々では女性が仕事の場にいることに違和感がなく自然な扱いをしてもらえることがそういう気分にしてもらえるのだと思います。私は日本の伝統的なビジネス文化が生きている製造業の中で働いています。特定部門を除けば職場は圧倒的に男性が多く、多くの会議で女性が1人という環境にいました。もう慣れてしまって、いつもは意識することはありませんが、それでもどこか居心地の悪さがあります。オフタイムの会食でも共感を得られないような話題はできるだけ避ける、というような窮屈な環境から解放される自由な感覚があるのだと思います。

思えば、米国留学中にスカウトされて入社したばかりの当初は、ある意味もっと自由に行動していた気がします。「ビジネスマナー」違反も結構していたのでしょう。レディーファーストの習慣で先に乗ってしまったエレベーターでドアが閉まってから気づいたら自分以外役員しかいなかったというようなこともありました。後から気づいても後の祭り。救いは中にいた役員から温かい言葉をかけてもらったことです。当時は、会議の席上で女性からの提案は受け入れがたい、という人がいるという状況にはあまり配慮していませんでした。

しかし、日本の産業界で長く仕事をしている間に次第に環境に適合したのか、受け入れられやすいいくつかのパターンを考えながら行動するようになってきました。女性の場合一般的な配慮に加えて、女性に対する相手の理解度を考慮せざるを得ません。もちろん相手が女性の場合は別ですが、残念ながら私の場合はそういうケースはほとんどないのが現実です（海外が必ずしも女性が働きやすい環境が整っているわけではありませんが、しかし、日本よりこういう点での気遣いは少なくてすみしました）。

私は政府のさまざまな委員、大学の評価委員、学会委員への就任や、講演を依頼されることがありますが、できるだけお引き受けすることにしています。忙しいといつ自分の業務や専門領域のことに埋没しがちです。しかし、社外の多様な活動にかかわる機会があると、自分でもその内容について勉強しますし、各方面で活躍している方々からお話を聞けるので刺激にもなります。自分からロールモデルを見つけようとする意識や活動も重要で



す。こういった社外のネットワークは貴重な財産となり、蓄積されていくものです。

ジェンダーイクオリティに貢献する情報通信技術

さて、私はこの30年、情報通信技術の進歩を目の当たりにしてきましたが、ジェンダーイクオリティに2つの点で大きくプラスの影響を及ぼしていると思います。第1はITシステムの活用がいろいろな業界でグローバル化を加速し、それがいやがうえにも人材の多様性を必要とする点です。すなわち、グローバル競争時代、当然企業はグローバルなユーザを対象とし、グローバルなパートナーと仕事をする事となります。その結果、企業にとって異文化の受容、異質な人材の活用が成功の鍵となりました。グローバル化が進んだ分野では外国人や女性という多様な人材の活用が大きな課題です。そのなかでも特に、日本では遅れている女性の活用がグローバル大競争の勝利への第一歩です。グローバル化が進んでいる業界であればジェンダーイクオリティは大変有益なはずで、女性の活躍を阻む文化は、人権の問題ばかりではなくこれからの経済の発展にとっても大きな問題なのです。

第2点は、情報通信技術の進歩によって多様なワークスタイルが可能になったことが挙げられます。インターネットが普及し、かつ、日本でもネットワーク通信費が安くなった今日、誰でもどこからでも簡単に情報収集でき、また、多様なコミュニケーションが可能となりました。ユビキタス社会の実現により、在宅勤務、サテライトオフィス、モバイルオフィスなど必ずしもオフィスにいなくても業務が遂行可能であり、さまざまなワークスタイルが可能になったことは非常に意義深いことです。自由度の高いワークスタイルは、とりわけ育児、家事を過度に負担している日本の女性にとって大きなメリットをもたらすことと思います。ジェンダーイクオリティを進める活動はこのユビキタス社会の恩恵を最大限に活用すべきです。

このようにITの進歩は、ジェンダーイクオリティの推進を大いに支援することができます。しかしながら、それが十分に活用できていないのが現状ですから、先進的モデルを今後どんどん作っていく必要があります。とりわけ情報通信業界でよいモデルを作ることは技術の進歩という観点でもメリットが大きいものと考えます。高

いニーズがあれば技術革新へのモチベーションも上がります。ジェンダーイクオリティは情報通信技術分野の成長スパイラルを構築するのに非常にいいケースになるものであると確信しています。

おわりに

30年前の米国と今日の日本における自分自身の経験を通じて女性のキャリア形成の環境と日本の発展の可能性を考えてみました。海外のデータと事例が示すように、環境を整えば日本においても女性はもっと幅広く活躍できます。私は、日本の環境が女性にとって非常に厳しいなか家族の協力のもとで、海外に留学し、海外で働くことによってある程度の実績を積んでくることができました。その後もニーズの変化に対応しながら、なんとか仕事しやすい環境を自ら作ってきました。必要とする教育や経験を積むことによって初めて私たちは自分に自信を持つことができ、さらに上を目指すことができます。そして、育児や家事、介護など現状では女性に重く負担がかかっていることに対して、夫婦間での協力関係はもとより、社会的なサポートが十分得られ、家庭生活も満足できる状態になっていることによって、さらなるキャリアアップにも挑戦することができるのです。私自身はお茶の水女子大学時代の先輩の教えや米国での経験がエネルギーとなってこれまで継続してチャレンジしてこられたのだと思います。これからは日本でも女性が自信を持って、気がねすることなく活躍できる環境作りが非常に重要です。

情報処理技術の進化はその活用の仕方でもプラスにもマイナスにも働きます。経済のグローバル化が進み競争がますます激化する社会で女性が働きやすい環境は何かを考え、それを技術に反映することが今後の重要課題です。この分野の女性が増え、女性自身ももっと影響を及ぼして新しい発想の研究が進み、新しい技術が日本から発信できることを願っています。

(平成19年9月28日受付)

国井 秀子 (正会員) hkunii@src.ricoh.co.jp

(株)リコー 常務執行役員・ソフトウェア研究開発本部長、リコーソフトウェア研究所(北京)有限公司 会長。テキサス大学でPh.D.取得。ACM, IEEE, 電子情報通信学会各会員、日本学術会議連携会員。2006年IEEE東京支部から“Woman Pioneer Award”受賞。